

Title	日本漢籍の国外流出：明治前期の概観
Sub Title	The outflow of the Chinese classical documents from Japan in the early Meiji Era
Author	佐藤, 道生(Sato, Michio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.88, (2005. 6) ,p.24- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00880001-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本漢籍の国外流出

——明治前期の概観

佐藤 道生

はじめに

我が国は古来、中国文化の影響下にあり、絶えずこれを積極的に学んできた。中国文化を受容する方法とは、具体的には漢籍を学習することである。それ故我が国には中国から直接に、或いは朝鮮半島を経由して多くの漢籍の写本・刊本がもたらされ、国内に於いてもその書写・刊行が盛んに行われた。また日本人は自らも漢語漢文を用いて著述を爲した。これら日本国内に在って日本人が用いた漢籍を総称して日本漢籍と呼んでいる。日本漢籍は時代とともに増加し続け、その蓄積量は江戸時代末期にピークを迎えた。ところが、鎖国が解かれ明治維新を迎えるや状況は一転する。「脱亜入欧」のスローガンが掲げられると同時に日本漢籍はその価値を正當に認められなくなり、中には国外に流出したのもあった。明治前期に於ける中国の知識人による漢籍収集について詳細な考察を加えた先行研究に、陳捷氏の『明治前期日中学術交流の研究』（二〇〇三年、汲古書院）がある。これによると、この時期、日本から中国に輸出されたの

は書物のほか、その版本も含まれ、その数は膨大であった。これら国外に所在を移した日本漢籍の現存状況について、一昨年から住吉朋彦、中川博夫、堀川貴司、山田尚子の諸氏とともに調査を始めた。本稿はその中間報告とでも言うべきもので、明治前期の日本漢籍の国外流出の実態を概観するものである。

一

そこでまず日本漢籍の特徴について説明しておくことにしたい。日本という語を特に冠して呼ぶのは、日本漢籍が中国本国に現存する漢籍、或いは朝鮮半島に現存する漢籍とは顕著に異なる点があるからである。それは

- 1、佚存書を多く含む。
 - 2、唐鈔本系統の本文を伝える。
 - 3、訓点・書入れを有する。
- の三点に集約できる。

1の佚存書とは中国本土には亡佚して滅んだけれども、日本には現存する書籍を言う。『論語義疏』（梁・皇侃撰）、『文館詞林』（唐・許敬宗撰）、『遊仙窟』（唐・張鷟撰）などが名高い。これらは嘗ては中国で広く行われたが、ある時点で滅んでしまったものである。唐以前に成立した書で、宋代に出版される機会を逃したものが大半を占める。

2の唐鈔本とは唐代に流布していた本文であり、現在通行している宋刊本系統の本文と対立するものである。中国では宋代に入って出版文化が花開き、唐鈔本に大胆な校訂が施されて宋刊本が成立すると、これが權威化して、唐鈔本系本文を駆逐した。以後、中国では刊本が流布し始め、明代半ば以降、書籍といえば刊本を指すようになった。¹⁾写本の流

通は極度に減少し、たとえ写本が存在しても、それは刊本を書写したものと見なされた。この点こそ、書籍といえは写本を指した我が国と根本的に異なる点である。中国では二十世紀初めまで唐鈔本が宋刊本と対立する本文を持つことは勿論、唐鈔本が存在することに対してさえ、それほど関心が払われなかった。日本に現存して唐鈔本系本文を持つものとして『白氏文集』が名高いが、これが唐鈔本の姿を伝えるものであることに疑念を抱き、宋刊本（通行本）との本文異同を日本人による恣意的改変の結果と見なす研究者は今なお多く存在する。

3の訓点・書入れこそ、我々が最も重視しなければならない日本漢籍の特徴である。本文の左右に記された仮名（傍訓）、漢字に付されたヲコト点や声点、余白に記された注記などは全て、紀伝道の博士家などの漢学の専門家が長年にわたって検討を重ねた本文解釈の結果として書き入れられたものである。まさに日本人による漢学の成果を示す貴重な資料であるといえよう。しかし今、これらは国語資料としてのみ研究される傾向にあり、漢籍の解釈に資料として用いられることは殆どない。むしろ訓点は本文解釈の障害になると考えられているのが現状である。

二一

次に日本漢籍が海外に流出し始めた原因、契機を具体的に探ってみたい。一般に漢学の衰退は明治期から始まったと言われ、日本漢籍の流出もそれに関連して述べられることが多いが、当時漢学が衰退の一途にあったのか、その実態は必ずしも明らかではない。ここではそれとは別に三つの原因を指摘しておきたい。

その一は、日本が鎖国を解くと同時にヨーロッパの外交官や研究者が日本研究を始めたことである。彼らは研究の一環として日本の書籍を収集することに努めた。それは例えば、イギリスの外交官、アーネスト・サトウであり、スウェ

ーデンの地理学者、アドルフ・ノルデンシヨルドである。彼らの収集した中には日本漢籍も多く含まれていた。⁽²⁾

その二は、明治元年の神仏分離令に伴って起こった廃仏毀釈である。これによつて寺院の蔵書も打撃を受け、廃棄されたものも少なくなかった。例えば、鎌倉の鶴岡八幡宮では、境内に十二か所あつた真言宗塔頭の僧侶が神仏分離令の施行と同時に八幡宮の神官に転じ、仏像、仏画、経典をはじめとして寺院の什物はすべて破却された。経藏中、元版一切経（普寧藏）は辛うじて難を逃れ、現在、東京浅草の浅草寺に蔵せられている。

寺院の蔵書が漢籍を多く含んでいることは言うまでもない。仏教経典自体、漢訳されたものであるから、紛うことなく漢籍であるが、その内典以外に寺院には外典の漢籍が多く所蔵されていた。これらの多くが廃棄され、顧みられなくなったのである。

その三は廃藩置県に伴つての藩校蔵書の庫外流出である。藩校の中には県の教育機関への移行が叶わず、廃校に追い込まれたものも少なくなつたのである。寺院蔵書と藩校蔵書の庫外流出は明治初期に顕著な現象であるが、これより遅れて、その後の社会の変動に起因してか、公家や大名家からも大量の漢籍が売却され始める。一例を挙げれば、平安時代以来儒家の頭領であつた菅原氏の東坊城家も、新しい時代の波に抗しきれず、蔵書を全て売却するに至つた。その大半は徳富蘇峰の成實堂文庫に納まつたと言われている。払われた時期は定かではないが、東坊城徳長が『本朝統文粹』の校訂作業にあたり、明治二十九年五月にその業を終えていることからすれば、この家が漢書を廃棄したのはそれ以後のこと、蔵書売却は明治三十年代以降のことであつたと思われる。

こうして、明治初め、古物市場に現れた大量の日本漢籍を精力的に購入したのは、主として中国の知識人であった。中でも外交官として来日した黎庶昌、楊守敬の二人は日本漢籍の善本を数多く購入したことで知られる。黎庶昌は第二代清国公使として、明治十五年二月来日、明治十八年一月まで任にあり、また第四代公使として、明治二十一年にも来日している。楊守敬はこれより早く初代公使、何如璋の随員として明治十三年来日、四年後の明治十七年帰国の途についている。楊守敬は、来日時身分は清国公使の随員であるが、実は目錄学、金石学を修めた学者であり、また書家としても著名で、日本の書道界に与えた影響も多大であった。⁽³⁾

図版1は明治十六年(一八八三)永田町の清国公使館で行われた重陽の宴で、公使の黎庶昌が自ら筆を執って書いた詩序の自筆原本である。これによると、当日招かれた日本人の顔ぶれは、森立之、重野安繹(成斎)、長松幹(秋琴)、巖谷修(一六)、藤野正啓(海南)、中村正直(敬宇)、川田剛(甕江)、向山栄(黄村)、三島毅(中洲)、亀谷行(省軒)、宮島誠一郎(栗香)、石川英(鴻斎)、森大来(槐南)といった錚々たる漢学者たちで、これを迎えた中国公使館側には黎庶昌のほか楊守敬、姚文棟といった一流の学者がいた。このような会合は頻繁に持たれたようで、黎庶昌、楊守敬たちはこうした場を利用して日本漢籍に関する情報を集め、善本の閲覧、さらには購入に努めていたのである。⁽⁴⁾

彼ら中国の知識人が注目したのは、日本漢籍の特徴の第一に挙げた佚存書である。黎庶昌は収書の成果を楊守敬の助力を得て、いち早く『古逸叢書』刊行というかたちで示し、楊守敬は日本漢籍研究の成果を『日本訪書志』に著わした。後年、楊守敬が帰国の途に就いたとき、日本滞在中の業績を振り返り、昵懇の漢学者である岡鹿門に次のように語って

重九燕集詩序

光緒八年壬午予會日本人士於上野
精養軒修登高約也明年癸未再與
斯會益免其人東士來與者曰森之曰
重野安澤曰長松幹曰巖谷修曰藤
野正啓曰中村正直曰川田剛曰向山榮曰
三倉毅曰龜谷行曰宮島諒一郎とん
川英曰森大來中士則宜都揚守敬惺
吾之速方潛益于聽武進陳允頤養源
上海姚文棟才梁崇明黃迺曾冷梅吉安
江景桂秋槎譯官梁殿勳憧堂凡二十一
人同會使署之西樓使署據燕壇地樓

殊而道同聲離而情並傳曰登高能賦
可以為大夫宜有以張今日之雅者然如牛
山之涕泣則無取森君老儒七十七翁雷
聲淵默酌道用盡恭講鞠臆時然其
容辭自上坐作而歎曰使君之言其可
誦哉於是眾實愉怡興有所會託物
造端酬倡環疊賦各表篇章詩富素心無完
辭而極樂無禮數而有倫風乎雅聲
也及酒罷各各盡懽以散崇其詩
得五十有二首錄存而為之序遵
差我黎庶曰



図版 1 黎庶昌自筆の詩序

いる。傍線部がそれに当たる（引用の『観光紀游』については後述）。

〔観光紀游卷一、明治十七年六月四日条〕楊君金石学、優為一家。東游以後、就好事家、搜索隋唐古書。考証同異、大有所得。曰、余官貴国四年、無涓滴補国。唯為黎公罔羅古書、刻古逸叢書二十六種。購得隋唐逸書百餘筐、此外參考古書、撰日本訪書録二十卷。此皆宋元諸儒、所未夢見。故雖囊橐索然、不少悔。

（楊君の金石学、優れて一家を為す。東游以後、好事家に就いて、隋唐の古書を搜索す。同異を考証し、大いに得る所有り。曰はく、余れ貴国に官たること四年、涓滴たりとも国を補なふこと無し。唯だ黎公の爲めに古書を罔羅し、古逸叢書二十六種を刻するのみ。隋唐の逸書百餘筐を購ひ得、此の外、古書を参考して、日本訪書録二十卷を撰す。此れ皆な宋元の諸儒、未だ夢にだに見ざる所なり。故に囊橐索然たりと雖も、少しも悔いず、と。）

現代の我々の目から見れば、日本に現存する漢籍の古写本は唐鈔本系統の本文を伝える貴重な資料であるという、日本漢籍の第二の特徴も疎かに出来ない点である。しかし楊守敬の著作を見る限り、日本漢籍古写本に見られる通行本の本文異同についても言及してはいるけれど、彼の関心はむしろ佚存書や佚文、宋元版・明版の稀覯書にあったように見受けられる。これは冒頭に述べたように、中国では写本の価値がそれほど高くなかったからで、楊守敬といえども、その通念の呪縛から逃れられなかったということである。実のところ、中国で写本の価値が注目されるようになるのは、二十世紀初頭、敦煌から大量の写本資料が出土して以降のことである。

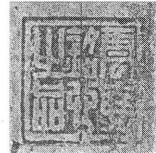
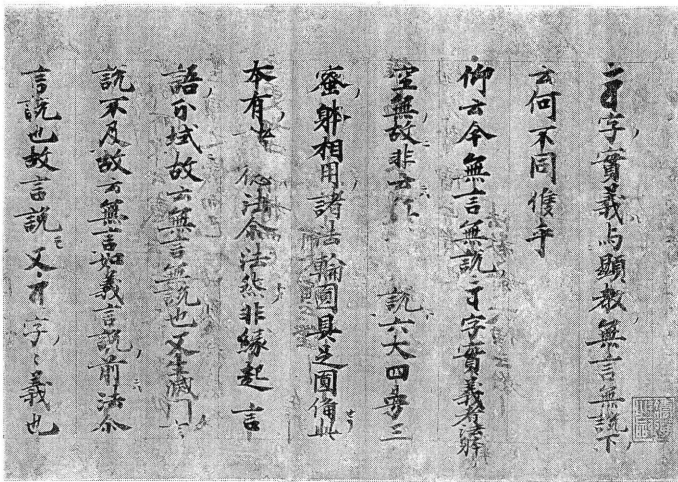
また、我が国の古写本については、それが国書であろうと、漢籍であろうと、これを買ひ求める強敵がいたことも、

楊守敬等が容易にこれを手でできなかった原因ではないかと思われる。それは、明治維新を境にそれまでの身分的束縛を解かれて古書の獲得を自由に行えるようになった一群の収書家たちである。その代表格は、浄土宗知恩院の鵜飼徹定と京都の呉服商、田中教忠である。浄土宗、浄土真宗は神仏分離令の影響を何等蒙ることがなかったから、鵜飼徹定は廃仏毀釈によって由緒ある寺院から放出される貴重な仏教書籍をいともたやすく購入することが出来た。田中教忠はジャンルにとらわれず、善本を買いあさったが、年号庵と称したことからもわかるように、奥書に書写年時が記されている古写本を特に好んだ。金沢文庫本の『白氏文集』を一時は三十巻近くも所蔵していたといわれ、これは金沢文庫本『白氏文集』には必ず書写奥書が記されているからである。金沢文庫本『白氏文集』が海外に一卷も流出しなかったのは、田中教忠の収集のおかげとも言えるのである。

四

さて、日本漢籍を積極的に購入した中国人は、このような外交官や学者といった知識人ばかりであったのかというと、そうではない。次に掲げるのは漢学者、岡鹿門の『觀光紀游』である。これは明治十七年五月から翌年四月まで、鹿門が中国に渡って各地を旅行した記録であるが、往路は折しも任期を終えて帰国する楊守敬と同道している。鹿門は神戸港から出航して上海に渡った後、楊守敬に誘われて蘇州・杭州の名所を遊覧した。以下は杭州での記事。

〔觀光紀游卷二、明治十七年七月五日条〕至珠寶街、訪顧雲臺へ良鵬。雲臺前年游日東、買求書籍、來此開書肆。滿架図冊、一半東書。（珠寶街に至り、顧雲臺へ良鵬を訪る。雲臺、前年に日東に遊び、書籍を買ひ求め、此こ



図版2 仏書断簡 下は顧良鵬の蔵書印2種

に來りて書肆を開く。満架の図冊、一
半は東書なり。

〔同卷二、同年七月七日程〕雲臺邀余
及惕齋、泛舟西湖。(雲臺、余及び惕
齋を邀へ、舟を西湖に泛ぶ。)

〔同卷三、同年八月十五日条〕過顧雲
臺告別。(顧雲臺を過ぎりて別れを告
ぐ。)

これらの記事から、顧良鵬(雲臺)とい
う商人が日本で漢籍の版本を安価に仕入
れ、それを杭州で売りさばっていたことが
知られる⁶⁾。鹿門は顧良鵬とかなり懇意にな
つたらしく、記事に見られるように、とも
に西湖に遊ぶこともあり、また杭州を發つ
折りにはわざわざ店を訪れ、別れの挨拶を
している。

この顧良鵬という人物はたんなる商人ではなく、自身も古書を収集していた節がある。図版2は京都・醍醐寺に所蔵されていた仏教儀礼書の断簡（伝醍醐寺聖宝筆）で、明治二十二年の古筆了仲の極め書さと極め札とが付されている。おそらく廃仏毀釈によつて庫外に出たものである。絹地の卷子装に装訂され、また「日本古写経」と題簽に記されていることから、これを当初所持したのは中国人であつたようだ。二十三行に及ぶこの断簡の初めと末尾には藏書印が押されている。印文が「雲臺銘心之品」「顧氏鑑藏古經異書」と読めることから、これは顧良鵬（雲臺）そのひとの旧蔵書であつたと考えられる。

顧良鵬が何ゆえ日本の古写経に関心を持ち、この断簡を愛蔵したのか。そこには楊守敬の強い影響があつたのではないかと思われる。次に掲げるのは鹿門が顧良鵬の店を訪れる十日ほど前の記事である。

〔觀光紀游卷二、明治十七年六月二十五日条〕擬買舟一游虎邱、以雨止。惺悟雜陳在東所獲古写経、把玩不置。曰、此猶晉時筆法。宋元以下、無此真致。

（舟を買ひて一たび虎邱に遊ばんと擬すれども、雨ふるを以て止む。惺悟、東に在りて獲る所の古写経を雜陳し、把玩して置かず。曰はく、此れ猶ほ晉時の筆法のごとし。宋元以下、此の真致無し、と。）

惺悟は楊守敬の字。ここで楊守敬は、日本の古写経に晉代の筆法が見られるとして、その価値を称揚している。このような光景は、おそらくその後も至る所で見られたはずであり、その身近にいた顧良鵬がその感化を受けたことは充分想像されるところである。

さて、明治前期に於ける日本漢籍流出の実態は、以上述べたようなものであるが、明治二十七、二十八年（一八九四、九五）の日清戦争の前後から状況に変化が見られ始める。日本の国力が増強されるにしたがって、書籍の流れが逆になり、日本人が中国から漢籍の善本を購入するという現象が顕著になるのである。それを象徴的に示している例が三菱財閥の岩崎弥之助による陸心源の旧藏書、冊数にして四万五千冊の購入である。これが明治四十年（一九〇七）のことである。日本漢籍について言えば、三井高堅、徳富蘇峰といった財界人、或いは内藤湖南、狩野亨吉といった新しい時代の中国研究者が明治三十年代から収集を始めている。したがって、この時点で日本漢籍の国外流出のピークは過ぎたようであるが、これ以降の日本漢籍の行方はさらに複雑な様相を呈してゆく。大正から昭和前期にかけての日本漢籍の流出或いは移動の状況、戦後の動向、それぞれに特徴的な事象が見出されるが、それらについてはまた別の機会に述べたいと思う。

注

- (1) 井上進『中国出版文化史—書物世界と知の風景—』（二〇〇二年、名古屋大学出版会）を参照されたい。
- (2) アーネスト・サトウ (Ernest Sautou) が日本で収集した書籍は現在大英図書館 (The British Library) に所蔵されている（一部、大英博物館所蔵のものがある）。アドルフ・ノルデンシヨルド (Adolf Nordenskiöld) が日本で収集した書籍は現在スウェーデン王立図書館に所蔵されている。Sören Edgren, *Catalogue of the Nordenskiöld Collection of Japanese books in the Royal Library, Stockholm 1980* はその蔵書目録である。大澤顯浩「瑞典王立図書館の漢籍について」（『言語・文化・社会』第2号、二〇〇四年三月）を参照されたい。

(3) 神田喜一郎「明治・大正の書道」（『藝林談叢』、一九八一年、法蔵館。「神田喜一郎全集」第八巻、一九八七年、同朋舎出

版)を参照されたい。

(4) 陳捷『明治前期日中学术交流の研究』(二〇〇三年、汲古書院) 第三部「古典籍の中国への流出と清国公使館の訪書活動」を参照されたい。

(5) 川瀬一馬『日本における書籍蒐蔵の歴史』(一九九九年、ペリかん社) 第二部2「明治時代前半の蒐書」を参照されたい。

(6) 陳捷『明治前期日中学术交流の研究』二五七頁を参照されたい。

付記

本稿は二〇〇四年度文部科学省科学研究費補助金による基盤研究(B)(2)「日本国外に現存する日本漢籍に関する研究」の成果の一部である。また、本稿の一部を二〇〇四年六月二十六日、慶応義塾大学国文学研究会に於いて口頭発表した。